

市民研 通信

NO.04

2010年9+10月 通巻131号

●市民研ホームページに掲載中の最新の論文

～すべてどなたでもダウンロードできます

巻頭言 市民研のホームページが新しくなりました
スマートフォン&ハイスペックPCと電磁波曝露
上田昌文（市民研・代表）

連載 住環境革命のために
第2回 新成長戦略都市環境革命
平松朝彦（市民研住環境研究会）

論文 ナノEHS（環境・健康・安全）研究の急進展
小林剛（東京理科大学ナノ粒子健康科学研究センター）

講演録 これらの工学教育に求められるもの
上田昌文（市民研・代表）

●市民研サーチライト

今回は現在名古屋で開催されているCOP10(生物多様性条約締約国会議)にあわせて、生物多様性の現状と問題点を理解するのに役立つサイトをまとめて紹介します。ぜひご覧になってください。

●WWF「特集：生物多様性」

現状データから会議での焦点となる問題の解説と提言まで充実した内容。

●環境 goo「生物多様性特集～地球から生きものがいなくなる日～」

●JST パーチャル科学館「生物多様性って何だろう？」

上記2つは映像資料が豊富で系統だった理解に適している。

●COP10/COP-MOP5 生物多様性条約 COP10 日本公式ウェブサイト

●環境省生物多様性センター「生物多様性」

条約の概要と日本政府の取り組みを知るために有用。

●日経電子版「問われる生物多様性」

特に経済・ビジネスとの関わりで重要な論点や多彩な論者の見解を紹介。

●コンサベーション・インターナショナル(CI)JAPAN

国際的な団体の日本語サイト。国際状況を概観するのに便利。

●国連環境保護基金 (UNEP) による『Global Biodiversity Outlook 3』

生物多様性の現状データをとりまとめ分析した最も基本となる報告書。

市民研ホームページが新しくなりました そのみどころは？



一番の特長は、1992年発足以来、『科学と社会を考える土曜講座通信』(92年～)『どうよう便り』(96年～)『市民科学』(05年～)そして『市民研通信』(10年～)とのタイトルで発刊してきた月刊の機関誌の主たる記事論文や、調査研究チームによる報告書や翻訳文書など(全体で約1000件)、最新のものまですべてアーカイブ化して「市民研アーカイブズ」のページで公開していることです。これは、手間暇をかけて自ら調べ考察しまとめたことを、すべて無料で提供しています。生活と科学技術の関わりは多様であり、問題解決にも多様なアプローチが必要とされる以上、可能な限り活動自体をオープンにして、どんな方々に対しても、いろいろなつながりを生むきっかけ、問題を多角的にとらえるためのヒントを提供することが大事だと考えるからです。

また、「調査・研究」のページでは、現在活動している7つの研究会から常時「研究会ブログ」で最新の発信がなされるようにしています。毎月の市民科学講座や市民科学談話会なども、毎回終わり次第、そのレジュメや音声・映像ファイルなどを「お知らせ」「イベント報告」でアップしています。

さらに、「会員募集」のコーナーなどに、PayPal(ペイパル)という、世界中で用いられているオンライン決済サービスを導入しました。会費やカンパや出版物などの購入代金は、これまでどおり、郵便振替口座と銀行口座のどちらを使ってもご送金いただけますが、今回このPayPalが新たに加わりました。amazonや「楽天」などとまったく同様のクレジットカードを用いた決済になります(手数料はかかりません)。どうぞ安心してご利用ください。

「お知らせ」などを通して、毎月書評などの原稿も募集をしています。毎月1日に書評対象とする本(約10冊)を更新し、2ヶ月間で投稿していただくこととなります。どうかふるってご投稿いただければと願っております。

「お知らせ」などを通して、毎月書評などの原稿も募集をしています。毎月1日に書評対象とする本(約10冊)を更新し、2ヶ月間で投稿していただくこととなります。どうかふるってご投稿いただければと願っております。

スマートフォン&ハイスペックPCと 電磁波曝露



スマートフォンの登場で、無線利用が一段と拡大する気配だ。学校や公共施設、家庭に無線LANが普及し、今さらに、屋外のことにおいてもPCやi-padなどから無線でインター

ネットにつなげることができるようにする、いわゆるWiFiの整備が驚くほどの勢いで進んでいる。私たちは現在、平均的にみると、周波数の種類からいっても、強度(電力束密度)からいっても、かつてない濃密な“電波のスモッグ”の中に身をさらしているのは、間違いない。「熱作用さえ一定レベル以下に収まるように、個々の電波の強さを制限すれば、健康に何も問題は生じない」という、多くの国が採用しているICNIRPのガイドラインの考え方が、じつはこの“高濃度電磁波スモッグ”の現実には照らすと、リスクのとらえ方として不十分であることが、「非熱作用を無視している」という従来からなされてきた批判に加えて、いよいよはっきりしてきたのではないかと。

●i-phoneをはじめスマートフォンの各社がじつはユーザーズガイドに(こっそりと?)「音声通話、もしくはワイヤレス・ネットワークに接続する際は、身体から少なくとも15ミリ、本体を離してお使いください」という注意書きを入れていることからわかるように、ICNIRPの基準値さえも超えるほどの強さでの曝露が生まれてきている。

●これまで比較的弱い超低周波磁場(商用周波数の50Hzもしくは60Hz)しか出さないと考えられてきたノートパソコンで、じつはハイスペックの最新機種などで、CPUの稼働率が高くなった場合などに、キーを打つ手が触れるあたりで数十mGにも達する場所があることがわかってきた(市民研の独自調査、年内に報告書の形で公表予定)。

●スマートフォン+WiFi+ハイスペックノートPCを毎日長時間使用する人では、高周波と低周波をあわせた曝露が相当大きくなっているだろうし、そうした人もますます多くなっているだろう。

これらの点を考慮した様々な計測や曝露評価が早急になされる必要がある。 【上田昌文(市民研・代表)】